

読書通信

第2号

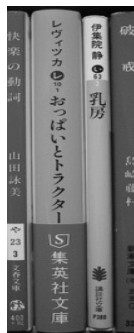
発行人: amagata

選定図書読了調査 個人最高は十四冊

「読書通信」創刊号で示した選定図書五〇冊に関するアンケートを九月に実施した。177人中65人(36・7%)が選定図書を1冊以上読んでいた。読了の冊数合計は141冊、一番多く読んでいる生徒は14冊だった。一方、残念ながら、約6割の人が1冊も読んでいなかった。読了作品のベスト3は以下の通りだ。

- 1位 太宰治「人間失格」(24人)
- 2位 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」(21人)
- 3位 村上春樹「ノルウェイの森」(15人)

その後十二月十二日現在、更に39人の生徒が選定図書を讀み、合計104人(58・8%)となった。



□ 本棚より □

家の本棚に「おっぱいとトラクター」と「乳房」が並んでいた。この偶然に驚き、おかしみを感じた。

マリナー・レヴィツカ著、青木純子訳「おっぱいとトラクター」(集英社文庫)。いかにも軽そうなたイトルだが、内実は重い。父親の再婚を通して描かれる家族の歴史。そこには、遺産問題、移民問題、老人介護問題など、重いテーマが重層に列挙されている。けれども、それを軽妙に描いているところにこの作品の深みを感じる。男にとって「おっぱい」は永遠に希求するものである。また、ウクライナ系イギリス人の元エンジニアの老父にとって、論文「ウクライナ語版トラクター小史」執筆が人生を賭けたテーマであった。

伊集院静著「乳房」(講談社文庫)。愛しい妻は癌で入院している。病室での二人の会話は哀しく切ない。実生活では、伊集院静の妻夏目雅子は二十七歳のとき、急性骨髄性白血病で天逝している。夏目雅子の笑顔を想起し、よりいっそう悲しみが増幅される。

他にも本棚を探してみると、澁澤龍彦著「ヨーロッパの乳房」、千葉敦子著「わたしの乳房再生」があった。

【選定図書五〇冊から】

椎名麟三「深夜の酒宴」
しいなりんぞう しんや しゅえん
— 生きることは堪えること —

どうしてぼくは生きているのだろうか。何のためにぼくは存在しているのだろうか。時折、そんなことを考える。

「僕は幾度も吐いた。だが僕のこの必死の分泌物は地上に影さえもとめないのだった。(中略) 僕が胃のなかからこみ上げてくる苦悩を吐いても、僕はそれを地上に見ることが出来ないのだ。」

嘔吐しても何も出ない。嘔吐物さえも自分の存在を証明してくれない。つまり、自分の存在を証明するものは何もないのだ。ただ苦しみに「堪える」しかない。

「この小説は敗戦直後を舞台にしている。それゆえ、物質的な豊かさは現在とかなり相違がある。けれども、精神的な状況はほとんどいまと変わっていない。依然ぼくたちは、不条理の社会の中に解し難い歪みの隙間に強引に捻じ込まれているのだ。そして、ぼくも「僕」と同様、ただ堪えがたい現在に堪えているだけなのである。」

落ち込んだとき、ちよっと鬱になったとき、この小説が読みたくなる。それはぼくが、「僕」に親近感を覚えるからだ。ぼくにも確たる拠り所がなく、現実の社会に違和感を禁じ得ず、「堪える」しかない。生きる為に堪えるのか、或いは、堪える為に生きるのか、解答は定かでない。ぼくには、予期せぬ苦悩が絶え間なく降ってくる。それは雨のように蒸発せず、ぼくの身体に徐々に蓄積している。

からだ。ぼくにも確たる拠り所がなく、現実の社会に違和感を禁じ得ず、「堪える」しかない。生きる為に堪えるのか、或いは、堪える為に生きるのか、解答は定かでない。ぼくには、予期せぬ苦悩が絶え間なく降ってくる。それは雨のように蒸発せず、ぼくの身体に徐々に蓄積している。

《あらすじ》

・敗戦直後の日本の、異様な日常を描いた作品。敗戦前に共産党員のため、牢に入れられた経験を持つ主人公の「僕」が、アパートの同居者たちの間で、「堪える」物語。

《おもな登場人物》

- ・僕(主人公)
- ・仙三(伯父)
- ・加代(アパートの同居者)

《冒頭と結び》
「朝、僕は雨でも降っているような音で眼が覚めるのだ。」
(中略)

「それは加代が酔いつぶれている僕の頭を子供のようにつけてながら、脱けて来る髪を指に巻いては畳の上へ落していることだった。」

後記

十一月下旬頃から喪中がきが届いています。今年は喪中がきが多く、沈痛な思いに駆られています。特に、教育実習のときにお世話になっ

【最近読んだお薦めの本】



N先生の高校の先輩でもある池井戸潤が著した「下町ロケット」。彼はこの作品で直木賞を受賞した。

下町の小さな町工場が開発したロケットエンジンで、大企業に挑み、ロケットを飛ばす。その夢に賭けた男たちの戦いを描いた作品。

「俺はな、仕事っていうのは、二階建ての家みたいなんだと思う。一階部分は、飯を食うためだ。必要な金を稼ぎ、生活していくために働く。だけど、それだけじゃ窮屈だ。だから、仕事には夢がなきゃならないと思う。それが二階部分だ。夢だけ追っかけても飯は食っていけないし、飯だけ食っても夢がなきゃつまらない。」
(本文より引用 P337-338)

た先生が亡くなられていて、大変ショックを受けました。まだ退職されたばかりなのに、残された者は精一杯生きなければなりません。